

法
藝

知
有
練

惜
登
私



服部應賀著

定價三錢五厘



官許明治七年十二月三日

他人を眼のまへへ

そら譽をして

うしろ指をさすものなりけり

己が心を他人の

あつらひて己が

藝のよへを

見さへ



諸藝畑水練

服部應賀著

○ 當今東京府下の奇代の人物わらまて小太鼓を叩き大道を大音お出来内くと呼わぬ諸藝人の家と見るにたれ其前おいてるりく出来内くと罵詈雑言をさるるを仏徒の物をふゆわらば又商人ふゆわらば町々おその其者を深く不審り彼方此方を聞わらせり或人渠を天上ふまむ造

物天子ぶつてんの落胤らくいんとやらあて名を出来輔できすけと号者ごうしやあるが
此程このほど駿捷すんてつ雲の間断まきだまより此下界このげを見まひに諸
人の業わざとよむる藝能げい多く其本意ほんいをあらぬ而已のみ
らび夫を又諸人へ指南しゅなんするがゆへ弥世上いんじやうに石
曰藝蔓延げいばんえんとよむが藝の本意げいほんいを聞かせる耳眼みみ
と持ぬ看物かんぶつを兎うも角かくも指南しゅなんするの
ともくお其藝の本意げいほんいを教んが為ためへてさるかせ話
お高たかひ処ところ々々さまざま天降あまふりて金銭かねぜんもさうば町々まちまちを
廻まわる粹狂者すいきやうしやあるまじい渠これがせまのいいと呼よんでた助

てき助と答こたへる其家へ這入こゝろて問答もんたうするやうと傳つたうを
さす。宇出野強うでのつよといふ劍術けんじゆの先生せんせいりつての外いふ憤いらいり
彼十日かれじふにち不なといせん吾誓わがちか古場ふるばをのぞいた。いいと
いひ高言たかごんも夫とあらぬ見道けんどうせうが再び来きる
ハ譬たとへ天魔鬼神てんまきしんありとも吾腕野強わがでんのつよが手てを見
せむらんと數多かずおほの門人もんじんを合手あひてお自じ賛さん毀き化かす
折おり出来内できないくとよぶ声こゑのさしはそれ来きる
彼と問答もんたうするやうち誓ちか古こを止とめと制せいし先生
自じら大音声おほいんせいふ。出来できをけくと呼よび出来内できない

できるといふと答へ門内へ入を門人走ちり出てすまま
稽古場へ案内志しけとび先生せんせいを飾かりかぬぬのいくくおお臂ひ
を膝ひざのうへ張たて云いふ汝なんぢ出来助できまけとやや某それの自慢流ドまんりゅうの
鋤道ひんぎょうを以もて指南しはんととび斯くのどく余多あまある門人かどれ
うちお業わざの出来できる者ものを眼前がんぜんお見みるく日外道場にげだうじょう
の前まへおおイい出来内できにくと嘲わらふと武道ぶだうの耻辱ちぢうかつ
ハ他流たいうへのへとと甚お遺憾おんげんハはりり今日けふさいといいふ言こと
棄すの死論しろんををぐぐ業わざの活論かつろんを以もて出来助できまけの出
来内できにと確定くわていととりり其その処ところお道具たうぐををめめけけととた

速すみに我われ高弟かうていと立合たちあいを望のぞみ促うながす高弟かうていの長なが
井佐弥太いさやまたを早速さつそくと仕度しどを整ととめて竹たけ劍けんををめめちち稽古
場じょうへ出いけけ余よの門人かど面固手めんこてと出来助できまけおおととて
盗人かすかどを捕とらへ心持こころもちお仕度しどを予よつつててひひくれくれとと
いまいまどど其手そのて並ならびと見みるるののくく半恐はんきよう半悔はんかいととりりちち出
来助できまけの道場だうじょうへへみみのの合手あてへ一礼いちれいととりり早くはやく佐弥太さやまた
ハ狂人きやうじんお水みづををああびびせせとと躍たりり上ありりハハツツトトウウエイエイくくの
高たか声こゑをを発はつつてて互あいいのの擲合ちきあととりり先生せんせいお一心いっしん不ふ乱らんお
見みてていいりりかか出来助できまけの竹刀しちたうハ一本いっぴんお合手あておおわわららびびさん

ざんお打伏らるれば數多の門人も一同お声を上げて笑
ひるより先生出来助おむらひて「汝連雀我大鵬の心
と志は斯のどき門弟数人おむらひて以来我門前を通
行するお出来内と嘲うときも首の骨を碎くと思へ先
今日は無事おかくせが過日の廉言を侘うとあり満座れ
門弟子おむらひて御手のうち美事。多く出来助くと
祝言せよと言ふとせが「イヤくてもあつく」こやつ慮外りのめ
わのどく打擲れるがうまむとあつくうすうの痛が身骨へ
深ぬと見おむらひて今一度某が立合。身うとせがぬらぬと

小泣面をかきせて美事出来助のいせえに見ると立上り
くれは袴を引とめ「イヤ先生お待るさま。譬私と打殺すと由
てさあいのいせえあいの。其證と言葉でのう。そ由是を日本
の合戦あゝ頭あゝ兜を頂き面頬腕臍胴まゆも皆鏝あゝ
造りゆの更今のごうへお擲ちしてハ竹釘あゝむらとせうけま
真の太刀あゝバ又ガ欠て役あゝたぬ其上近年ハ銃隊の
世とあゝまゝイヤ怨敵御参あゝとと太刀を構へて白眼でも
飛くる玉ハ請苗がうく敵ハ一丁先あゝいせえ手と延て切
れもせがてさまゝハ小事の用あゝ立とも大事の戦用にち

音曲調子の事

琴と味縁の相子と

つゆめの人の子らと

りのてまぢく

世の仲ふ自然と

天があらんて

あつのおよと合せ

とをあるもの

るまは人の

春夢の風去

ふよりて



かきとありて申けしお

あつてりて二百里

二百里とてつと申か

つとてつと

つとてつと

つとてつと

つとてつと

つとてつと

つとてつと

つとてつと

物興成



いそいであろう又各自分の流義を自負するほど噴淨
留理の流義とちがひて、釘道の唯切の一筋あるまじき物好
の拵や流義の殺を為すぬか、武道由大平の世に
根が枯て枝葉があらざるが是を以て出来内といふ
あゝあゝ此此外肝心の出来ぬ、訳の活物をりて
お眼ふくけると側小解捨て、男帯二筋と道場の真
中お長く延。此上を御弟子中よく渡りぬとのべられぬ
くともさうなるふ一人踏とづさ移る皆笑ふを見て「イヤ
まご笑ふささるるでるは是ううが肝心。何卒此の家根へ御

案内をとつて皆々不審あのおどろちと案内といふ二
階より出来助ゆつひて家根へいざ携へ大鞆と鬼瓦に
かゝり立て立戻り。イヤお先生方此東のまへより棟の上
を渡りて西の鬼瓦お立ちひる大鞆をばささて見ると搦
をさささるまじき皆々吐胸をつく中より我慢の若者我
第一お叩くうまの汝が頭も序おたくと横さぬ、這上
れ「イヤそのやうお猫がおめむ如くあらば最前帯を渡
すゝゝおあちの棟よりあちの棟へ棟瓦の上をさされ
よとつて「安房ぬるまき。板の間と家根といふ亀のこと大陽

様。ふとせいの命かあひ、君子の浮雲といせぬりのと四這に
るりてあまぐくおをい戻り、いせぬがらふ執昔古場へ下りて田けを
出来助いせんの大鞞と取て先生の前へ立戻りて云「
扱先生由是より御覽るさしごとく御門人の中に棟
瓦を一人とていせりしりのかり粵おおつて出来内といふ
格言とお聞きあきとよ二寸の帯の上と渡り者い三四
寸の上とていせりし猶やせぬとあきとよ帯の板の間へ在
い踏まづしゆ中怪我いあぬと安心とていせりしよくいせりし棟
い三四寸の中あきとよ踏まづせぬ危しとの心配より渡

諸人此
条不
附耶
上

らとび此両条を以て譬れ、帯の執昔古棟の真釘
ありさきとよ執昔古お達者ありとよ真釘お立向つて
臆病の發りのあぬおぬいせぬ人をも業より第一に
鍊心才智かみけしとよ真の名入出来助といはせぬ
せぬ。かち私存外へ暇いせぬ。先是生心あて暇
と表へ出るがちせぬ出来内くと呼るがら四五丁行
けらふ或家の表へ大勢人集りより其家を暫
く伺ひあつて、頓て大鞞とたきさるがら出来内くと
罵りけしむ内より若者走つて出て袖をとりて

若「あやうごころくさくさ野路馬ぶつらの耳ある念佛の浄
 留理ゆころるまがく人此家の東京の名人と呼ぶる大
 夫三絃ひさの集會ある聞えくば一分のせ。さるくは
 早く行とあるまじい「我のあの手ある浄苗理ハ聞
 くゆなり又行とゆみくまじいふもつて出来内く
 と声を張あげ大鼓ととたきまじいある内より二三
 人の来りてむる内へぞ引入ける。

諸藝畑水練上 終

此續早出板仕候 板元

力真服部應賀小説表

| | |
|--------|-----------|
| 馬鹿の大妙薬 | 権兵衛種蔭論 |
| 畑水煉 | 太郎兵衛水掛論 |
| 近世あはれ墓 | 孫兵衛活計論 |
| みぢ摺男 | 智恵の秤 三号 |
| 虫類大議論 | 驕人びつろ箱 |
| 返魂新妻祭 | 東京花毛抜 |
| 日本大國柱 | 金庫三代記 三冊全 |
| 日本魂 | 青樓半化通 三冊全 |

小説社書林

- 小傳馬町三丁目 山寄屋清七
- 大傳馬町三丁目 丸屋庄五郎
- 神田須田町 高木和助
- 神田通新石町 紀伊國屋徳蔵
- 人形町通新采物町 上州屋重蔵
- 濱町三丁目五番地 星野松蔵

010190524944

| | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|------------------------|--------|--------|-------|-------|-------|
| 五幣かじぎ | 天配合々傘 | 新聞商方談 | 日本女教師 | 放言深山かき | ニヤウチウ談 | 心の道行 | 童女早学文 | 自業自訴詔 |
| 洋学舌切雀 | 天上大珍事 | とむぢん語 | 利口女 <small>おんな</small> | 市の虎狩 | 牛馬論 | 東西花角力 | 蔵の鼠 | 万亭置土産 |

大門通浪花町
 鶴屋喜右衛門
浅草観音寺内三王門前
 児玉彌七
 芝神明前
 和泉屋市兵衛
 北朝町
 弘父堂佐平
 照降町
 惠比寿屋庄七
東西國元町五番地
 鈴木勘二郎
浅草花川戸町
 相摸屋七兵衛